

査初白「寒食行」考

——初白における東坡詩への傾斜——

菅原博子

清の趙翼は、その著『甌北詩話』に、李青蓮・杜少陵・韓昌黎・白香山・蘇東坡・陸放翁・元遺山・高青邱・呉梅村をとりあげ、それに次いで卷十に査初白を収める。

梅村後。欲學一家列唐宋諸公之後者。實難其人。惟査初白才氣開展。工力純熟。鄙意欲以繼諸賢之後。

すなわち、呉梅村の後に一家を挙げて、唐宋の諸詩人の後に列しようとする、まことにその人を得がたいが、初白こそ才気はのびのびとひろがり、詩作力は十分に熟しており、わたくしのかんがえでは、まさに李青蓮にはじまる諸賢の後を継ぐに十分であると思う、とあって、ひそかにその卓見を誇るのである。康熙の世において、詩では、王漁洋、朱竹垞が第一人者であり、「南宋北王」と並称されるほどであった。とりわけ漁洋は、詩からおのずとあふれでるそこはかとなき妙趣をたいせつにする「神韻説」を提唱して、押しも押されぬ詩壇の盟主であった。しかし、趙翼はこの二人をとりあげない。その理由を、漁洋について「阮亭専ら神韻を以て主と爲す：専ら神韻を以て勝れども：終に八面敵を受けて大家と爲すに足らざる也」と、また竹垞について「亦た海内の重名を負ふ：究には風雅の正宗に非ず」と述べる。さらに、漁洋・竹垞を排して初白を取るといふ見解を笑う者がいるかもしれないが、初白の詩を落ち着いて読ん

でみると、なかなか味があり、「其の功力の深きは、則ち香山、放翁の後一人のみ」という。また詩の味わいばかりでなく、多作という点でも、香山、放翁に匹敵するほどともいう。

初白の集として、「敬業堂集五十巻續集六巻」が、四庫全書集部別集類に著録されており、詩凡そ五千二百余首を残す。その提要に「其の淵源を核するに、大抵は諸を蘇軾に得ること多しと爲す。其の一生の力を積んで蘇詩に補註するを觀れば、其の力を得るの處見るべし矣」というように、初白の詩の源は東坡であり、さればこそ三十年もの歳月をかけて『蘇詩補註』を完成するのであるが、趙翼は、初白の東坡詩への嚮往については何も述べない。

『敬業堂集』には、王士禎・楊雍建・黄宗炎・陸嘉淑・鄭梁・唐孫華・許汝霖の七人の序がある。これらの序はすべて、初白が蛮地に赴いてそこで佳作を残したことに就いて言及する。前四者のそれは、初白の第一詩集である「慎旃集」(卷一至三)についてのもの、鄭梁のそれは、「慎旃二集」といわれる「西江集」(卷四)についてのものであり、後二者のそれは、『敬業堂集』についてのものである。漁洋は、初白の外舅陸嘉淑にたのまれて序を書いたのであるが、その序では、初白の近体詩について、黄宗炎が初白の詩を品評する際に陸游に比したことを認めた上で、「奇創の才」は初白が劍南にゆずり、「綿至の思」は劍南ほどの人でも初白にゆずるといい、古体詩については陳師道、元好問の風格があると述べる。黄宗炎は、兄の宗義とともに、初白の父の友人であり、また初白の師でもあったが、初白を白樂天のあとを継ぎ、陸游の堂奥を追蹤する者と評価する。外舅陸嘉淑の序はいささかほめすぎのように思えるが、初白のことを行役中の疲労困憊している時にもつねに父母兄弟に思いを寄せるといふ風雅の根本をわきまえた「陟岵の詩人」であると称する。友人鄭梁は、初白を杜甫以後の詩経精神を継ぐ者であるという。以上いずれの序も、初白がいかに東坡詩に傾倒していたか、またいかに東坡詩から強く影響を受けたかをいわない。これら四人の序は、初白が『蘇詩補註』を完成させる以前のものであるので、言及しないこと自体おかしくないのかもしれないが、趙翼が、それについて

何も言わないのは疑問である。私は、「敬業堂集提要」にみえる四庫館臣の指摘に従うものである。そこで、ここでは「寒食行」一篇をとりあげ、初白がいかに東坡詩をよく読み得ていたかを証する一端としたい。

二

「寒食行」は、『敬業堂集』卷十獨吟集に収める。この一篇は、先に掲げた『甌北詩話』に五古のすぐれたものとして詩題を録するほか、張維屏の『國朝詩人徵略』卷十九にも詩題を録する。和刻本としては嘉永二年（一八四九）刊『敬業堂詩鈔』四巻があり、その巻二に収める。

『敬業堂集』は続集を含めて、すべての巻に集の名がつけられており、各集のほとんどに自序がある⁽³⁾。この序によって初白のその当時の様子を知ることができる。また、これら各集の序のほかに初白の伝記資料としては、外曾孫陳敬璋による『查他山先生年譜』⁽⁴⁾がある。この年譜には、藏書家として有名な呉騫の序、彌甥沈廷芳の「翰林院編修查先生行狀」、桐城派の始祖として名高い方苞の「翰林院他山查公墓誌銘」を冠する。年譜は六世の祖、查秉彝より始まる。康熙十八年己未（一六七九）、この年は初白が家長として一族の生活を双肩になうべく、貴州巡撫となった楊雍建の幕下に入ることを決意して、貴陽（貴州省）へと旅立つ年であり、また「慎旃集」⁽⁵⁾が始まる年でもあるが、陳敬璋は、この康熙十八年の条で、初白の集が編年詩集であり、おそらく己未以前の作は後に伝わることを願わず、自らすべて処分してしまったのだろうと述べる。従ってこの年よりあと、年譜と『敬業堂集』とは並行する。

卷十の「獨吟集」は、康熙二十八年の「外舅陸射山先生挽歌二章」に始まり、その年の九月までの作品を収める。初白四十歳の時である。その序は、

去夏到家。外舅陸先生。風孿漸減。猶冀稍延歲月也。乃今二月。竟爾不起。余既視含殮。復徇故人之招。匆匆北上。

關山獨往。觸緒悲來。不禁涕泪之横集也。

である。去年（康熙二十七年）の夏、帰郷、外舅陸先生の中風の病も少しく良くなり、もう少し長生きしてほしいと思つていたところ、今年二月ついに他界、納棺もすんだので、また友人の招きに従つてあわただしく北に向い、関山を独り越え往くが、ささいなことでもきっかけとなつて悲しみがこみあげてきて、涙を禁じ得ない、と外舅を亡くした悲しさ寂しさを述べる。外舅陸先生とは、初白が十八の時に迎えた妻の父、陸嘉淑のこと。字は冰修、号は射山また辛斎。同郷の海寧の人で、父の友人であり、かつ黄宗羲を指導者と仰ぐ清朝に対する抵抗運動の志士でもあった。初白の父は、名を崧繼、字を柱浮といつたが、明の亡国に遇い、弁髪を強要した清王朝に対する抵抗として、名を遺、字を逸遠と改め、そのうえ子供たちに科挙のための勉強を禁じたほどの人であった。さらに黄宗羲を師と仰ぐ環境の下にあつて、初白は、明の遺民の子としての自覚を十分植えつけられたことであらう。しかし、すでに初白も陸嘉淑も、ともに科挙を受験するため都に滞在する転向者となつていた。この外舅に初白はよく事えている。康熙二十七年、外舅が中風の病にかつたため、介抱しながら郷里までつれ帰つた。その旅の道中、筆をもつことのできない外舅にかわつて、初白がその口誦する詩を書きとめたりした。また帰郷後もよく世話を続け、そのため詩作の時間がなく、「余亦た詩無し矣」と巻九「春帆集」の序にいう。そして迎えた外舅の死である。まさしく「獨吟」せざるを得ない。

初白は、先に述べたように、康熙十八年、三十歳の時、貴州巡撫楊雍建の幕下に入るべく貴陽へと旅立つのであるが、この旅は、父の服喪中であること、また明の遺民としての志を貫き通した人の子でありながら、生活のためとはいえ間接的に清朝に協力するようになったことへの後ろめたさを心に抱きながら、予測、予断の許されない蛮地へ向けての慣れない旅であり、実際に戦乱の悲惨さを目にした旅であった。彼の第一詩集「慎旃集」は、自らその序にいうように、『詩經』魏風陟岵に、「上慎旃哉 猶來無棄（上わくは旃れを慎まん哉 猶お來たりて棄てらるる無かれ——吉川

幸次郎（詩経国風による）とあるのによつて名づけられている。陟岵は孝子が行役して父母兄弟を思う詩である。初白にとつて父母はすでに亡き人であるが、常に心に残るめたさを抱きつつ、郷里に兄弟妻子を残して、戦鬪やまぬ地へ赴くのである。この時の初白の氣持を端的に表わし得ているといえるであろう。この年は武陵（湖南省）で除夕を迎え、翌年武陵から貴陽と移り、三十三歳の秋に帰郷する。

康熙二十二年癸亥（一六八三）三十四歳の時は家居するが、三十五歳の夏、科挙受験のため京師に游学し、そのうち三十九歳までずっと都に留まる。父の存命中は、北は蘇州、南は杭州までで、それ以上の遠出をしたことのない初白であるが、貴陽へと旅立って以後、その晩年に至るまで、郷里にゆっくり腰を落ちつかせる時はあまりない。康熙七年戊申（一六六八）十九歳で、やっと科挙受験のための勉強を父に認められた時から、いずれは転向者として受験し、清朝に仕えることになるであろうことは予測できたのであるが、この四年に及ぶ京師滞在中に受けた順天郷試は見事失敗、外舅の病氣のためとはいえ、不本意な帰郷、失意のうちの帰郷をしたわけである。

なかなか合格できない焦躁感に悩み、世間的名声を求めようにも求められない不遇の身の上を達観することもできず、生活苦という重圧に加えて、自分のよき理解者であり、学問上、詩作上の先輩でもある大切な人を失った悲しみを新たに迎えた寒食節、まして外舅他界直後の、本来ならば服喪期間中であるはずの旅先で迎えた寒食節である。初白にとつては、ひとしお胸に迫るものがあつたことであろう。

三

老鴉銜紙錢

老鴉 紙錢を銜み

飛上白楊樹

飛んで上る 白楊の樹

破廬誰氏子

破廬誰が氏の子

拏榼上冢去

榼を拏げて冢に上り去く

新鬼土作堆

新鬼は土堆を作し

堆平鬼亦故

堆平らかなるは鬼も亦た故し

百年過鼎鼎

百年過ぐるごと鼎鼎

孰者非朝露

孰者か朝露に非ざらん

安知今樓臺

安ぞ知らん今の樓臺の

不是昔墟墓

是れ昔の墟墓ならざるを

十年寒食節

十年寒食の節

九度他郷路

九度他郷の路

看到野棠梨

野の棠梨に看到れば

荒山春又暮

荒山に春又た暮れんとす

からすが寒食の墓参の折に焼かれる紙銭をくわえて、吹く風にわびしく音をたてている白楊の樹に飛び上がった。近くのあばらや、誰ともわからぬが、おけをぶらさげて墓参りに行く。「東坡が「墳墓万里に在り」と詠んだように、父や舅の眠る故郷をあとにして旅の途中にあるわが身は、墓に参ろうにも参ることができない。」なくなったばかりの霊は、埋葬した土が小高い丘となり、時を経て平らになった丘は、そこに眠る霊もまた年経たものである。どんなに長くても百年という人間の一生、それはたゆみなく流れていき、みな朝の露の如くはかないものにすぎないではないか。

「そんな一生の間にいったいどれほどのことができるというのであろうか。」現在高殿のある処が、みなもとは墓だったといってもよいのではないか。生活のため、節を曲げて貴州へと旅に出た時から十年、毎年寒食節はめぐってきたが、その十年のうち九回も私はそれを他郷で迎えている。野辺に咲く棠梨の花を目にするにつけても、あたりの荒れはた山に、春はまた暮れゆくとしていっているのだ。

この「寒食行」が意識するのは、東坡の名作「寒食雨」二首である。東坡の「寒食雨」は、元豊五年（一〇八二）東坡四十七歳、左遷された黄州の地での作である、査初白は『蘇詩補註』巻二十一に収める。

自我來黃州 已過三寒食 年年欲惜春 春去不容惜 今年又苦雨 兩月秋蕭瑟 臥聞海棠花 泥汗燕脂雪 暗中偷負去 夜中眞有力 何殊病少年 病起頭已白

わたしが黄州に来てから、もう三たびめの寒食の日がめぐって来た。毎年、逝く春を心ゆくまで楽しみたいと思うのに、春はわたしの気もちにはおかまいなく、たち去ってゆく。そのうえ今年は降りつづきいやなが雨に、このふたつきがほど、秋をおもわせるようなら寒い日ばかりだった。床の中で聞く雨音に、海棠の花の、べにで化粧した雪の肌も、ぬかるみに散っては泥まみれにされてゆくさまが目に見えてくる。「莊子に、舟や山を深い谷や湖に隠すということが書いてあるが、わたしは、この「春」を、わたしが心ゆくまでたのしめるようになるようになるときまで、どこかへ隠しておきたいものだ。しかしこれもまた莊子がいうとおり」くらやみにまぎれてこっそり盗み出し、背負っていってしまう、そんな力もちが、ま夜なかにはほんとに現われそうだ。「こうしてこの地に、一年一年と春を送っている」病気にかかった少年が、やっと病床を離れられるようになってみると、すでに白頭の翁であるのとなんの違いもないことになるのだが……。

春江欲入戸 雨勢來不已 小屋如漁舟 濛濛水雲裏 空庖煮寒菜 破竈燒涇葦 那知是寒食 但感烏銜紙 君門深九重 墳墓在萬里 也擬哭途窮 死灰吹不起

水かさを増した春の長江の流れは、いまにも戸口をはいって来そうなのに、雨気はおしよせてくるばかりで、まだとても去りそうにない。小さな住まいは、もうもうとけむった水と雲との中にただよういさりぶねさながらである。がらんどうのお台所では、粗末な野菜を煮ようとして、こわれかかったかまどに、湿った葦をくべている。これではどうして今日が寒食だとわかるう。ただ、烏が、まい上がった紙銭をくわえているのによって、それと知るにすぎない。「朝廷に帰ろうにも」天子さまのご門はこのえの深さがあり、「故郷へ帰ろうにも」墳墓の地は万里のあなたである。ではやはり、あの晋の阮籍が行きどまり途に出くわすと大声をあげて泣いたのならって、わたしも泣こうか。いや、よそう。灰になった紙は吹きたてたとて燃えあがらないものだ。(集英社『漢詩大系』17蘇東坡近藤光男訳による)

黄州に流されて失意の状態にあり、経済的にも困窮している東坡は、病床にあって気分はめいるばかりであるが、おりからの長雨に打たれる海棠に思いを寄せるといふやさしい面をみせつつも、不遇の身の現実を直視する。東坡のそんな憂鬱の心情を初白は最もよく理解できたのではないだろうか。「十年寒食節 九度他郷路」と詠ずる初白の胸にあるのは、「自我來黃州 已過三寒食」と詠み始めた不遇の東坡の、いかんともしがたいやるせなさであったであろう。東坡という号は、そもそも白樂天にちなむものであるが、その白樂天の「寒食」詩(那波本卷六十二)には「我歸故園來 九度逢寒食」という。樂天は、人間の老後の楽しみは故郷に帰ることだといひ、故郷にもどってのんびりと九回寒食節を迎えたと詠むが、初白の九度の寒食節とは大ちがいである。東坡も、もちろん初白も、樂天のように故郷でのんびりと寒食節を迎えることをどんなにか願ったことであろう。しかし所詮は単なる希求にすぎないといわざるを得ない。

が、希求は希求としてあるがままの自分を見据えようという強さが、沈鬱な中にもうかがわれるように思える。

東坡は「寒食雨」の中に海棠の花を詠み、樂天は、「寒食」の中に「四鄰梨花の時 二月伊水の色」と梨の花を詠む。海棠の花が東坡ゆかりの、梨の花が樂天ゆかりのものとするれば、初白詩中の「棠梨」とは、あるいは行く春を惜しむ時節に、人の心をなごませるように可憐に咲く花をいうとは解せないであろうか。

樂天は「寒食野望吟」(那波本卷十二)に「風曠野を吹いて紙錢飛び 古墓纍纍として春草緑なり」と、吹く風に舞い飛ぶ紙錢を詠むが、東坡は、からすが紙錢をくわえると詠む。からすが紙錢を銜むという発想は、東坡以前にその用例をみないようなので、あるいは東坡独自のものといっているのではなからうか。とすれば、初白が「寒食行」の第一句に「老鴉 紙錢を銜み」と詠むのは、東坡詩の忠実な祖述といえるであろう。

以上からしてこの「寒食行」ほど東坡詩を強く意識したものはないのではなからうか。東坡の作があったからこそ「寒食行」が詠まれたといっても過言ではないように思われる。

四

初白は、翌康熙二十九年、今度は都から南帰するという、前年とは逆の旅程でたどる旅をする。前の年一人で通った道を、友人の姜宸英、字は西溟とともに連れだつて唱和しながら歩く旅である。ここにその道中、寒食の頃の作を二首あげる。涿州は河北省涿県、新城はその南に位置する。

寒食過涿州和西溟⁽⁹⁾ 寒食に涿州に過り、西溟に和す。

柳色初濃凹字城 柳色初めて濃し凹字の城

胡良河上偏清明 胡良河上清明偏^{さま}る

故園三百長亭外

故園は三百長亭の外

貪得花時一月晴

貪^{むさ}ぼり得たり花時一月の晴るるを

「凹字城」とは、涿州の街が凹字形のようであるということか。ここ涿州までやってくると、柳の色がいよいよ青さを増し、ひとときわあざやかにしてきた。胡良河のほとりに清明を迎えようとする。思えば吾が郷里は三百長亭も遠く離れたところ、「とすれば今年も旅先でのこととて墓参などはできない、心は痛むが」幸いなことに比較的穏やかな天候が続いたので、今年のこの春の花の時ひと月を十分に堪能することができた。

清明新城道中

清明新城道中

縣南風颭酒帘多

縣南風颭^{そよ}ぎ酒帘^{しゆれん}多し

澹澹新烟瑟瑟波

澹澹たる新烟瑟瑟たる波

一路人家齊上塚

一路人家齊^{ひと}しく塚に上る

紙錢飛過白溝河

紙錢飛び過る白溝河

県の南では春風がそよぎ、たくさん酒旗がはためいている。川面には静かに夕もやがたちこめ、春風に波立つその色は碧玉の色。街道沿いの家々では、家族そろって墓参に出かけていたのであろう。墓参で焼かれた紙錢が、風に吹かれて舞い、白溝河の方まで飛んでいった。「澹澹」はここではもやがたちこめたさまをいうのであろう。蘇轍に「横烟澹澹たり 俯して落日を見る」(「黄樓賦」)の句がある。「瑟瑟波」は白樂天の「寒食 青青たる草 春風 瑟瑟たる波」(「閒遊即事」)の句に拠るであろう。

この二首は、どちらも巻十一「題壁集」に収める。ともに寒食という時をとらえて、たまたま通りかかった土地での情景を詠んでいる。故郷を遠く離れている身ゆえに、墓参したくともできないつらい気持をより強く抱いたであろうこ

とは想像にかたくない。この時は外舅はもちろんのこと、初白の父母の亡きがらさえ、まだ埋葬してない⁽¹⁰⁾のである。従って家長としての腑甲斐なさも手伝ってやりきれない気持になると思うのであるが、この二首からは、沈鬱な気分、やるせなさは全く読みとれない。連れのある気楽さからであろうか。確かに「題壁集」序には、「口占の作多し、本と存するに足らず、之を存するは行跡を記す所以なり」といっており、単なる旅のつれづれの作といってしまうばそれまでなのであるが、この時の初白は大事件に遇ったあとで、いわば謹慎中の身であり、その心中は鬱鬱として、決して穏やかなはずはないのである。

初白が遭遇した大事件とは、「寒食行」を詠んだと同じ康熙二十八年の秋、趙執信が開催した洪昇の「長生殿傳奇」鑑賞会が、康熙帝の母の忌日にあたっていた⁽¹¹⁾という理由で告発され、参会者は処罰されたというものである。初白も参会者の一人として身分を剝奪されたのである。初白は、はじめ名を嗣璉、字を夏重といったが、このことが起因して、名を慎行、字を悔餘と改めた。外舅の死に匹敵する、否、それとは比べものにならないほどの衝撃を初白に与えた事件といえる。そのあとの旅で迎えた寒食であるから、行く春を満喫するとか、旅を楽しむとかの気分でないことは明らかである。にもかかわらず、物足りなくらいにあっさりとしている。初白自身は、卷十一「竿木集」序に「飲酒して罪を得たり」と述べる。

五

趙翼は、初白の詩を「白描」という。白描とは、いたずらに修辭や典故を用いず、ありのまま自然の趣きを大切にすることである。初白の姪にあたる查為仁の『蓮坡詩話』に、「家伯初白老人嘗て余に詩の律を教へり」として、

詩之厚在意不在辭。詩之雄在氣不在直。詩之靈在空不在巧。詩之淡在脫不在易。須辨毫髮於疑似之間。(詩の厚き

は意に在りて辭に在らず、詩の雄なるは氣に在りて直に在らず、詩の靈なるは空に在りて巧に在らず、詩の淡きは脱に在りて易に在らず、須らく毫髮を疑似の間に辨ずべし⁽¹²⁾

という一条がみえる。初白の作詩の法を知る唯一のものである。青木正兒博士は『清代文学評論史』(全集卷二)で、この初白の作詩の法をあげて、初白が「主として取る所の詩趣は△厚▽△雄▽△靈▽△淡▽の四者である。而して其れは意の厚きこと、氣の雄々しきこと、空。虚。な。る。靈。妙。、超脱せる淡味であつて、辭の厚きこと、粗直なる雄々しき、巧緻なる靈妙、平易なる淡味ではないと云ふのである。就中△空虚なる靈妙▽一項は特に注目すべきで、是は△空靈▽と云ふ詩學上の術語として行はれてゐるのであるが、具體的に云へば詩に典故や修辭を用ゐず、有りのまゝを述べて而も妙趣を得ることである。彼の詩は實に此の△空靈▽の妙を得たものとして有名であり、其れが彼の狙ひ處であつたわけであらう。全體彼の詩は白描即ち修辭を施さぬ作風を以て妙趣を現はすことに長所を持つてゐたので(趙甌北詩話卷十)、此に謂ふ所の四項は皆白描法の要訣である。蓋し△意▽を主とすると△氣▽を主とするとは並に修辭を重んじない傾向が強く、△空靈▽は即ち無技巧にして自然なる妙趣、即ち白描に因つて生ずる効果であり、△淡▽は固より修飾の少ないものであるから、此の四項からは當然色彩を施さない白描畫に比すべき詩が生れる道理である⁽¹³⁾」という。初白の詩は「白描」である点が長所であるといふのであるが、『甌北詩話』では、呉梅村が典故を用いすぎることに対して、

初白詩又嫌其白描太多。稍覺寒儉。一遇使典處。即清切深穩。詞意兼工。

という。つまり、初白の詩は「白描」が多すぎるきらいがあつて、いささか貧弱に思えるが、一たび典故を用いた所になると、たちまちきりりとひきしまり、奥深く穩雅であつて、詩の文句も内容もともにすばらしいものとなることとであろう。とすれば、この「寒食行」こそ、その好適例として挙げてよいように思われる。

なお、『國朝詩人徵略』卷三十八趙翼に、張維屏はその『聽松廬文鈔』を引いて次のようにいう。

初白之詩。空靈變化。有廣大教主之風。先生詩與之相近。故不覺爲鍼芥之投。然合觀全體。漁洋之高秀。竹垞之厚重。初白亦有所未逮。惟初白生當王朱並峙之時。獨能陶冶性靈。自成面目。此所以爲不可及。而先生舍王朱而特舉之。亦可云獨具隻眼者矣。

すなわち、初白の詩は「空靈變化」して、廣大教主（白樂天）の風格があり、趙翼の詩はこれに近いので思わず引きつけられてしまうが、全体としては、漁洋の「高秀」、竹垞の「厚重」に比べて、初白はまだ及ばない。ただ漁洋と竹垞が並峙していた時期にあって、ひとり「性靈を陶冶し」て自成一家の面目をなした点こそ初白のすぐれた所である。王朱を捨ててことさら初白を挙げた趙翼は、眼識を備えているといえる、ということ、趙翼が『甌北詩話』に初白詩を収めたことを高く評価する。

六

初白の『蘇詩補註』は、康熙十二年より三十年の長きにわたった仕事で、その完成は康熙四十一年壬午（一七〇二）五十三歳の時である。初白という号は、この前年、東坡の詩句「身行萬里半天下 僧臥一庵初白頭（身は萬里を行きて天下に半ばし 僧は一庵に臥して初めて白頭）」に因ってつけたものである。四庫に著録するその提要には、「補註東坡編年詩五十卷」とあるが、實際のその内容は、卷一から卷四十五に至るまでが「東坡先生編年詩」、卷四十六から卷四十八に至るまでが「東坡先生補編詩」、卷四十九・五十の二卷は「他集互見詩」となっている。

初白は、東坡の弟、蘇轍、字は子由の『欒城集』に編年の拠り所をもとめつつ、詩・手書・真蹟を手がかりに、同時に活躍した人々の文集及び宋元名家の詩話や題跋などを参考として作年代を決定したと、その「補註東坡先生編年詩例略」にいう。また、古人の「箋疏の学」の精神、つまり『禮記』曲禮上に「勸説する母れな、雷同する母れ」というよ

うに、己の「得る所を抒べ、雷同勦説に肯んぜず」の精神で注をするのだと述べる。従って、後の馮応榴が『蘇文忠詩合註』を撰するにあたって、初白の決定した作年代はそのまま踏襲された。明らかに誤っていると思われるものについては、案語を附して意見を述べるにとどめたのであるから、初白の仕事がいかにも馮應榴によって尊重されたか、うかがいしれよう。

初白は、康熙五十年十月の御製序を冠する『佩文韻府』に、「翰林院編修臣查慎行」として、その纂修兼校勘官の一人に名を列する。吉川幸次郎博士は、『佩文韻府』に於ける蘇詩の収録は、ことに丹念であり、精確である」と述べられたとい⁽¹⁴⁾う。とすれば、それは蘇詩に補注した初白の業績を踏まえたからこそであろう。

初白の東坡詩に対する補注という仕事だけをとりあげても、それが長い歳月にわたっているものだけに、初白を東坡詩の大なる理解者と規定してよいように思われるが、すでに述べたように、『敬業堂集』の序や『甌北詩話』などにおいて、東坡詩への言及がなされていない状況にあって、あえて「寒食行」一篇を手がかりに、初白の東坡詩に対する傾倒ぶりが詩作の上にも認められると結論づけたい。

注

- (1) 漁洋の序は、「敬業堂集提要」に引かれているが、その「提要」に引く序では、黄宗炎ではなく、黄宗羲が陸游に比したとしている。
- (2) 時期毎にまとめて一つの集とするのは、古来楊万里が第一とされていたが、查初白の集はそれを十分にしのぐものであることが、「提要」に指摘されている。
- (3) 自序のみられないのは、卷二十五「炎天冰雪集」「垂囊集」、卷二十九「赴召集」、続集卷五「詣獄集」、同卷六「生還集」の五つである。

- (4) 南林劉氏嘉業堂刊本（嘉業堂叢書之一）がある。京都大学人文科学研究所蔵。
- (5) 查初白と同郷の海寧の人。順治十二年の進士。全唐詩校刊官の一人楊中訥はその息子で、查初白によって墓誌銘が書かれている。
- (6) 父查遺は、この前年つまり康熙十七年戊午、初白二十九歳の時になくなった。
- (7) 「將に南昌の行有らんとして兒建に示す」（巻四「西江集」）に、「我が年二十九 足は郷閭きょうりよを出せず 舟を南して錢塘に阻はまれ 轅なぐさを北にして姑胥に限らる」とある。「姑胥」とは姑蘇山のある蘇州をいう。
- (8) 初白が順天郷試に合格するのは、康熙三十二年癸酉（一六九三）、四十四歳の時であり、進士及第はさらに十年後、五十四歳の時である。
- (9) 姜宸英には『葦間詩集』五卷（内閣文庫蔵）があるが、この集を検する限りでは唱和の作は見出しえない。
- (10) 父母の亡きがらを埋葬するのは、康熙四十五年丙戌（一七〇六）、五十七歳の時である。卷三十四「西阡集」では、埋葬できた喜びを述べる。
- (11) この事件は、『國朝耆獻類徵』卷一百十七趙執信に収める国史館本伝、及び汪由敦撰墓誌銘に詳しい。
- (12) 楊鍾義の『雪橋詩話』（一集卷三）に、初白が人に作詩の法を教えたとしてこの四項目を引く。但し「辭」を「詞」に、「直」を「貌」に作る。
- (13) 青木正児『清代文学評論史』第五章 詩壇の自成一家的思想の擡頭 四六七―四六八ページ。
- (14) 近藤教授が吉川博士の読社会に出席した折、博士から直接うかがった、と聞くところによる。なお、吉川幸次郎「查初白」が全集卷十六にあり、近藤光男『清詩選』に查慎行を収める。